生涯大学「海鳴学園」大学院

ふるさと研究発表会

●と　き　**平成 26 年 11 月 11 日（火）**
午前 9 時 30 分～

●ところ　**湖西市老人福祉センター集会室**

《研究発表会次第》

1．開　　会
2．学長あいさつ
3．来賓あいさつ
4．研究発表
　A班　「白須賀宿」
　B班　「江戸から明治にかけての飯田本陣」
5．指導講評
6．閉　　会

白須賀宿

A班

はじめに

皆さんは、白須賀の地名の由来について、ご存知でしょうか。白砂青松の地「白砂（しらすな）」が「白菅（しらすげ）」に転じ、「砂州（すなす）」から白須賀という地名が起こったと言われています。南に遠州灘を臨み、北に高師山を背負い、西は三河国と境界を接しながら、熊野往還に通じています。

東は、浜名湖を水源として、西南に流れていたと考えられる浜名川があり、外洋に注ぐ河口地帯には、「帯の湊（おびのみなと）」（白菅港）があったと言われています。

平安、鎌倉の中世の時代から白須賀は街道の要として栄えたところであり、特に江戸時代には、東海道五十三次ほぼ中間の宿場町であり、東西文化交流の地として繁栄を極めました。

その白須賀の数々ある歴史と伝統を全てお伝えすることはとてもできません。数ある中から「地震・大津波」「本陣」「勝和餅」「地曳網」四つを取り上げ、知識人のご説明を受け、写真を撮り、先生方のご協力をいただきましての発表になりました。

一、地震・大津波

白須賀を襲った大津波は、古いところでは、明応七年（一四九八年）。慶長九年（一六〇四年）、宝永四年（一七〇七年）、安政元年（一八五四年）とたびたび被害にあっています。その中でも宝永四年、今から三百年ほど前の十月四日、午後二時ころ。東海沖の海域を震源とする推定マグニチュード8・4という我が国最大級の大地震・大津波が発生しました。海上十メートルの大波が三回にわたって陸地を襲い、いくつかの宿場のなかでも浜沿いにあった白須賀宿は、特に被害を受けたのです。二百軒あった民家のうち全壊五十一軒、半壊三十七軒、流された家四十五軒、山の中腹にあった蔵法寺は、流出を免れ、本堂と庫裡が小破した程度でした。この津波の被害を受けたことにより、白須賀宿は、浜側より山の台地へと引越すことになります。白須賀は、幕府の天領（直轄地）であったため、宿場、民家引越しの費用として一万三四〇両のお金をもとに復興に励んだのです。

町内の敷地割り振りは、本陣・脇本陣を中心に、水路も左右に分かれ、旅籠・民家が三十六から百も並び、その間には、米屋、雑貨屋と決められていきました。

間口が狭く奥行きの長い土地です。当時の税金は、間口の広さで決められていました。

江戸時代の建物跡や溝などが出土し、その時代の生活の様子がわかってきました。出土品には、陶磁器、土鍋、瓦、銭などがあり、おんやど白須賀、南部構造改善センター等にもわかりやすく、地層堆積版が展示されています。

二、本陣と問屋

東に新居関所、西に二川本陣と、どちらもりっぱな建物があります。白須賀宿では、本陣は、当初、大村太郎左衛門家と大村庄左衛門家の二軒、脇本陣は、三浦惣次郎家の一軒でした。白須賀宿本陣二つの内、太郎左衛門家は、元禄六年（一六九三年）まで続き、その後欠所になりました。

欠所となった理由

夏から冬にかけて三河と遠江地方には、熱病のはやり病がでました。当時、天領（幕府直轄の領地）の白須賀宿は、中泉代官所支配、赤坂陣屋の管轄下に属していましたが、陣屋の役人が横暴をきわめ、宿場の人足に支給する賃金を十八年間に渡って着服していました。太郎左衛門は、人足たちの生活が極度に貧しく、しかもはやり病に苦しんでいる状態を見かねて、中泉代官にこのことを訴えました。これが、逆に役人の反感を買い、太郎左衛門と使用人として働いていた平八郎までも捕えられ牢獄につながれ、そのうえ住居や田畑のすべてが取り上げられ、本陣廃業に陥りました。

義僕平八郎について

二年後、主人夫婦と平八郎は、解き放されましたが、住む家もなく、その日の食事にもこと欠くありさまでした。平八郎は、宿場のあちらこちらを走り回って、粗末な小屋を借り、主人夫婦をそこに住まわせました。毎日、魚や塩などの行商に励みながら主人夫婦の生活を賄いました。

太郎左衛門は、名主でしたので、多年宿場の顔ききで親類や知人も多くありましたが、罪人であり、誰もが代官所をはばかって、同情の手を差し伸べてはくれませんでした。

これまで行商で儲けたお金は、一文残らず主人夫婦に生活費として渡し、平八郎は、単身江戸へ行くことにしました。毎日の仕事は、大変きびしいものでしたが、主人太郎左衛門の無実を晴らそうとする一念だけは、忘れることがありませんでした。

大名の行列に出会った平八郎は、決死の覚悟で駕籠訴（かごそ）を決行しました。当時は正規の手続きを経てない駕籠訴を罪とする時代でしたが、平八郎は十余年も前に、白須賀宿で中秋元但馬守に駕籠訴をしたことがあり、幸いにも殿様はそのときのことをよく記憶しておられたので、訴状をお取り上げになり、赤坂見付けの役人の非道はことごとく暴露して免職となり、主人の太郎左衛門は、潔白であることが証明されました。

元禄六年以降二十三年も長い年月が過ぎました。白須賀町は、この美談を永く留めるために、大正十三年（一九二四年）潮見坂上に「義僕平八郎之碑」を建てました。

問屋場

東海道五十三次の宿駅の開業により三十二番目の白須賀宿での馬継ぎをはじめとする業務は、従来幕府との関係のあった長坂家が問屋に就任して白須賀宿の問屋場を取り仕切りました。問屋場は、宿場の中にあり、その周辺の土地を含めて敷地はとても広く、問屋は、長坂久次郎が代々襲名し、問屋場の長として百人程度の人たちを動かしました。

問屋場の仕事は、人や馬の継立のほかに、飛脚業務があり、幕府公用の品物や書状を運ぶのを継飛脚といい、もっとも重要な仕事でした。

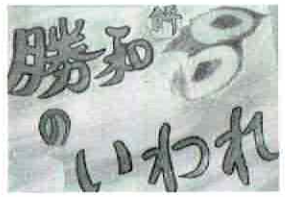
三、勝和餅

白須賀のたくさんある民話の中で「勝和餅」のことを知り、どんな食べ物か興味を持ちました。

本陣と問屋

宿場の名物「勝和餅」の由来は、天正十八年（一五九〇年）と言えば、今から約四百年前のことです。豊臣秀吉は、小田原城の北条氏直を攻めるため、大軍を率いて京都を出発しました。

秀吉の一行は、境宿あたりでひと休みすることになりました。その頃は、猿が番場といい、猿や狐など何時でも目につく淋しい野原でした。民家は、一軒もなく、たった一棟だけ粗末な造りの茶屋が街道沿いにあり、爺九十三歳、婆八十二歳の二人だけで街道を上り下りする旅人に商いをしていました。



そしてある日、茶店の土間へツカツカと入ってきた大将が、「腹が減ったが、爺さんや、何か食うものはないか」と話しかけてきました。爺さんは、恐る恐る「へ、へえ、かーか、柏餅なら丁度ごぜえますが」と小声で答えると、大将は「何、カチワ餅とな、どんな餅か、あるだけみんな出せや」

実は、爺さんは歯がみんな抜けていたので、大将には、「カシワ餅」が「カチワ餅」と聞こえたのでしょう。「ウーン　カチワ餅とは、や、や、縁起がいいぞ」と言ったのです。小男の陣羽織姿の大将とは、紛れもなく太閤秀吉公でした。

秀吉公は、北条氏を撃ち破り、大阪へ帰る途中、再び老夫婦の所へ立ち寄りました。上機嫌の秀吉公は、「今後は、この餅を猿がばばの勝和餅と申せ」と申され、貴いお墨付と小判をいただきました。

秀吉公ゆかりの「勝和餅」は、評判が次第に高まり白須賀の名物となりました。残念ながら「カチワ餅」は言いにくかったのでしょうか、しばらくしてからは「柏餅」として代々売られたようです。そして、「ばば」が「番場」に変わり、「猿が番場の柏もち」と呼ばれるようになりました。

その時のお墨付きは、境宿の跡見家（三枡屋）で代々大切に保管しておりましたが、百年程後の大火で焼失してしまったとのことです。しかし、番場（現在の境宿）のお祭りの若衆の名称は今もなお「勝和連」と言い、残っております。

「カチワ餅」は、モロコシで作った皮で蘇鉄の「あん」を包んだもので、蘇鉄の「あん」は、蘇鉄の実を粉に挽き、充分に練ったものを蒸したものです。多少の苦味と渋味がありますが、柔らかな甘みがあって香ばしさは格別です。柏の新しい葉の香りが餅にうつり、口の中一杯に広がる美味しさを想い出される方々もおられることではないでしょうか。

柏餅は、柏の木が冬でも落葉せず、そのまま新芽ができるめでたい木とされ、今でも風薫る五月五日の端午の節句にはかかせない縁起物です。

四、白須賀地曳網

私たちが、小学校低学年の頃、波打ちぎわで遊んでいると、近くの浜辺では、網を引く元気なかけ声、たくましく、力強く一生懸命地曳網をしている漁師さんたちを普通に目にすることができました。

中学、高校と浜に行く機会もなくなり、大きな船も消え、改めて回りを見渡すと、高師山の松の木は、雑木林に変わり、砂浜は波打ちぎわまでの距離が短くなっていました。

ホーィホーィ
「おっときん、梅吉さん
が、色見があったって、
はねで呼んどるのん。
ちゃっといくかん」
「おー後はたのんだぞ」
「こいだけ片づけたら
わしも行くで」

こんな会話を繰り返しながら、白須賀の地曳網は、一八六一年頃文久年代に伊良湖地方から伝えられ、昭和三〇年頃まで約百年間くらい続けられました。網元は、十網で成り立ち、船は八十隻、各網には、甚六とか、四六網とかに名づけられ、一網には四、五十人の漁師がいました。

高師山一帯には海が見渡せる「はね」と呼ばれる所に、色見人が常時三、四人いて、どこの網より、いち早く漁群を見つけ、「ホーィホーィ」と仲間を呼び、浜に集合させて舟を出しました。漁師さんたちは、色目人さんの「ホーィホーィ」の声でどこの網が呼んでいるか聞き分けられました。

舟に網を積んで、色目人の白い布の動きで右に左に沖に舟を進め、魚群を取り囲んで網を張り、舟を浜に戻して、二メートルくらいの綱を腰につけ、後ずさりに網を引き揚げました。八人から二十人で「エンテコ」と言われたロクロに網を巻き取り、ひと網揚げるには、三、四時間かかりました。春から夏には鯵、太刀魚、鱚など、秋には鯖や鱸が取れ、冬はほとんどが鰯でした。

浜に揚がった魚の入った袋は、最高の値をつけた「いさば」と呼ばれる仲買人が落札しました。その時、漁師さんが家に持ち帰る「えんばい」と言われた魚は別にとっておきました。

大正元年頃の大漁とは一網二百円くらいの水揚げで、米一俵八円くらいの時代ですから、米二十五俵くらいに値したそうです。

そして、多くの水揚げがあった時は、日暮れ時になると、みぞれの降るような寒中でも、若い衆が、五人から十人ほどの一団となり、六尺ふんどし一本だけの素っ裸で、身を海水で清め、神社、仏閣、小神様にお酒一升ととれた魚を奉納して大漁のお礼と、海上安全、豊漁の祈願をして回りました。時には、豊川稲荷までも行ったそうです。

「おんやど白須賀」には「大津絵」と呼ばれる地引網と裸参りを歌った民謡が掲げてありました。

浜の松風音高く　遠州灘とその名も高き
この荒波を我々は　櫓櫂（ろかい）を相手に荒仕事
髪は嵐に吹き乱れ　エンヤヨイサと網を引く
中に大漁ある時は
エンヤラヤサン　ヤレコの声高く勇ましや
どんな寒さもいといなく　ハードッコイ
裸参りの若い衆が　声を揃えて礼参り

この様に長く栄えた地引網も、昭和三十年ころには潮の流れの関係によってか不漁が続き、漁師も生計が立ちゆかなくなり減って、網組織も順次、解散し、衰退してしまいました。

戦争から帰ってきて漁師だったことのある、九十五歳の佐原敏雄さんから手書きの貴重な資料を見せて頂きながら、お話を聞くことができました。一日大漁でも、翌日は漁が無く、又、次の日も無かったら、生活していくことは難しく、佐原さんは、他の仕事に変わったそうです。漁師をして良かったことは、「戦中、戦後の食糧難の時、大変助かったことと村の人たちの心が一つになり、まとまりが良かったことだった」そうです。

明治二十二年（一八八九年）東海道本線開通

湖西地区の路線は、白須賀を通る予定でしたが、住民の猛烈な反対にあって鷲津を通ることになりました。鉄道が通ると、「旅人の宿泊や荷物の運搬による収入がなくなってしまうから反対」、「蒸気機関車の音で魚が取れなくなるから反対」という意見があったようです。

明治時代になって宿駅、伝馬制度が廃止され、さらに、鉄道が普及すると、今まで歩きを主体としていた旅は、汽車旅行に変わり、街道筋の旅籠のまちは衰え、人馬輸送の往還稼ぎ等の仕事も激減したため、住民の生活は大きく変化しました。農業を主体とし養蚕や沿岸漁業（地曳網）に活路を開き、近年は近代農業の導入と大企業の進出、主要幹線道路の整備等により、再び活況を取り戻しつつあります。

昭和二十五年、豊田自動織機の協力工業が開業し、繊維業から鉄工機械工業へと大きく変わりました。昭和三十六年、産業の振興を図るため、工場誘致条例が施行され、多くの工場が進出することになりました。白須賀は工業の町として発展いたしました。

終わりに

住民たちは幾多の苦難を乗り越え、希望をもって生き抜いてきました。

白須賀は、美しい自然の残る町。歩いていると、傍らにお地蔵さまが微笑みかけ、民家や町並みは、今も宿場の面影を残しており、人の温もりと古い歴史の息吹きを感じさせてくれる、素晴らしい町だと思います。知れば知るほど　歴史の深さ、重さに感動を覚えます。

皆さんに少しでも白須賀のことをおわかりいただき、興味を持っていただけましたなら、大変嬉しく思います。

■参考文献

・湖西風土記文庫～語り継～
・湖西の民話
・湖北湖西の民族と史跡一〇一話（上）
・マイタウン白須賀　金田守人編著
・「こさい」ふるさと歴史探訪―六十年三月湖西市教育委員会発行
・紙芝居―礼雲寺　加藤憲学作

江戸から明治にかけての飯田本陣

B班

新居町にただ一軒だけ現存している飯田本陣に保存されている資料を基に本陣の果たした役割や当主について、歴史的観点に立って、九つのテーマを取り上げ、それぞれに関連する事柄について調べました。

一、本陣塾

本陣の飯田家は、信濃諏訪神社の神官金刺嘉盛を始祖とし、天正二年（一五七四年）徳川家康の今切渡船を助けた功により、新居宿の本陣として、また庄屋役、問屋も務めていました。

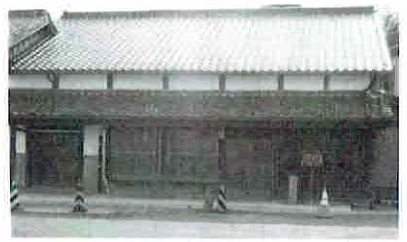
江戸末期から明治にかけて活躍した十七代当主昌秀、十八代当主温徳ついて調べました。昌秀は、三河の国西方村、今の御津町の山本平三郎の次男として生まれ、十五歳で飯田家の養子となりました。以前より吉田藩で国学者の中山美石に入門しており、新居に来も向学心やまず美石の紹介で白須賀の夏目甕麿（なつめみかまろ）の推薦で本居太平に入門し国学を学びました。また、実弟の敬雄は、豊橋羽田八幡宮の養子になり平田篤胤の門人となった文人一家であります。

文化十年（一八一三年）十一月師匠の中山美石が、今切関所の下改め役人として新居に着任したのをきっかけに文化十四年自宅を本陣塾として新居町内外の子女を集め教育を始めました。

新居は、三河の吉田藩の影響や東海道を往来する学者、文化人等からの刺激もあり、これにより本陣塾を中心に地域の文化水準が高まり、住民の中にも勉強会ができ文化が浸透していったようです。また、塾生の中には、国学者の鱸有飛、俳人の関所番頭五味六朗左衛門、関所役人、町医者、船割宿の主人等々多数の著名人がおりました。

また、昌秀の子温徳も小さい時から父の影響を受け、学問に秀でていました。父昌秀が早世した為十三歳で家督を継ぎ、二十六歳の時、関所役人山本忠佐、後に時習館教授となった山本顕斉の援助で中断していた本陣塾を再開し、多くの文人を育て近代に移行する新居に大きく貢献しました。

先日、飯田宅にお伺いした時、御当主も厚い辞書を何冊も手元に置き研究なさっておられました。向学の念は、代々受け継がれていると感心致しました。



二、地図

今から百五十年前、文久三年（一八六三年）十四代将軍家茂の上洛の時、幕府は警備の為の準備として、道中の各宿場、村の絵図の作成を命じました。

その時作成した新居の「宿場内軒別絵図」は、家の間口、奥行き、坪数、二階家、平屋の別、更に上・中・下の等級を付けた詳細なものでした。

当時の地図を見ますと町の様子がよく解ります。新居関所を中心に西側山麓に、お寺・神社を、街中は、京都風に碁盤の目に道路、水路を通し町屋が配置された街になっています。

このような街になるまでには歴史があります。約四百十年前、慶長五年（一六〇〇年）、関ヶ原の戦いの後、現在のヤマハ発動機の西側、港町付近に関所が設置され、その周辺に町屋が造られました。

約百年後と、その六年後、宝永四年（一七〇七年）の大地震と大津波により、新居宿全体が壊滅し、関所と共に、一度目は現在の新居高校付近、二度目は現在地に移転し、現在に至っております。

この時の街づくりは、吉田藩の土肥孫兵衛の指導により作られました。

興味深い例をあげると、京都に近い方を上、遠い方を下と呼び、上西町、上田町、中田町、田町となっております。上西町という呼び名は現在祭り用のみで、通常は西町と呼ばれております。田町はランク付けのように思われるため下を付けないと考えられます。

幕末期の家並みは、本陣が泉町の角に沿って三軒ありました。

本陣疋田弥五助宅は、今の泉町疋田医院で、この建物は昭和四十年代まで残っておりました。

本陣飯田武兵衛宅は、泉町交差点西側に現存し現在二十二代目が住まわれています。

本陣疋田八郎兵衛宅は、飯田本陣より一軒おいて南隣にありました。

旅籠屋は、現在資料館「紀伊国屋」を含め関所大門西側の泉町に、二十五軒位、軒を並べていたと記録されています。

中町・高見町・西町の街道筋は、大工・桶屋・左官職人が、船町・源太山は、漁師、船乗りが多く住んでいました。

現在の中町、栄組一角付近に、豪商・油問屋「若林屋」があり、この角から東に船町秋葉様常夜灯まで、まっすぐに伸びる三間道と呼ばれる道があり、この道は水路がなく広く、船で着いた荷物の通行に利用されていました。また、朝鮮の勅使一行も関所を通らず、こちらの三間道を通行したとの事です。

最後に、十八代飯田温徳が作成に貢献した「宿場内軒別絵図」は、原寸、畳三畳程で見事なものです。是非とも地域の宝として、大事に保管して戴きたいと感じました。

三、吉田藩救済

吉田城主松平信古は、徳川幕府の中でも出世コースを歩み大阪城城代となり政治の中心に居ました。しかし、慶応三年（一八六七年）十月十四日徳川慶喜が大政奉還をしました。翌年一月鳥羽伏見の戦いで旧幕府軍が大敗し、徳川慶喜は密かに大阪城より脱出、軍艦で江戸へ逃げ帰ってしまいました。このころ、吉田城内では佐幕か尊皇かで揺れていました。そして、新政府軍が、幕府の要職にあった藩に手心を加えず粛清するとのうわさが流れてきました。

吉田藩は、存亡の危機に立たされ一刻の猶予もなく尊皇派である事を明確に表明しなくてはならなくなりました。そこで、一月十二日、吉田藩は文化人としての交友の広さ、多くの人脈のある温徳に、朝廷への嘆願を請いました。特に公卿三条実美公は関白に次ぐ地位であって政府内でも大きな力を持っていました。

そして二日後、吉田藩年寄役でもある温徳は、病気療養中でしたが、病を押して吉田藩中老六人で上洛、政府要人との斡旋に奔走しました。二十五日間かけてやっと「城主が上京し降伏するならば許す」との承認を得て、再度、三月吉田城主松平信古と共に上洛して、新政府側に恭順しました。会津藩をはじめ幾つもの藩が非業な死をたどった中、太政大臣・内大臣の要職に就いた大人物と親交があったお蔭です。

明治二年、版籍奉還により吉田藩は豊橋藩と改称し旧藩主信古は豊橋藩知事に任命されました。

吉田藩が戦場と化すことを止めた温徳の功績は、多大なものがあり大変驚嘆いたしました。また、これらの実情は温徳が書き残している「家系草稿」の中の「美也古乃春」に詳しく書かれております。日記は、新居宿をはじめ全国の動静、国学者たちの交流を詳細に書いた貴重な記録となっております。

四、行在所

行在所は いく・ある・ところ・と書き、辞書を引くと「天皇が外出した時の仮の宿」と書かれております。慶応三年十月十四日、大政奉還により徳川幕府から明治の代になり、明治天皇が御

東幸された際、飯田本陣にお泊りになられました。

明治元年九月二十日、天皇は、京都を出発し江戸城に向かわれ、十月一日、新居に当日は、快晴ながら西風がやや強く吹く中、岩倉具視、中山忠能ほか供奉百官を従えた一行は、午後二時本陣に着き、翌日午前八時に御座船にて舞阪へと向かわれました。

そして同年十二月十五日、京都への御還行の折と明治二年三月十九日の御再幸の時もお休みなされました。

また、明治二年十月十三日、皇后宮、同五年四月一日、皇太宮の行啓の時のご宿泊所にもなりました。

そして、当時の本陣の屋敷地は約三百坪、建坪は百九十六坪にも及び客間だけでも三十余部屋あり、行在所は、次の間と御座所・坪内から成っておりました。

明治四年本陣廃止に伴い、御当主は、この様な聖上なる行在所を個人で永久に維持・管理するには、至難の事と苦慮しておりました。そんな折、県知事と引佐郡長が、民家に於いて永久に保存する事の困難な事を思い遣り寄付の労を取りもって、皇室と縁の深い方廣寺へ明治十八年移築し、この時、茶器、庭等も寄進しました。

移築時には、新居の有志千人以上の人達が協力し九月二日上棟式が行われ、「投げ餅数十俵、饅頭一万個、酒三樽用意される」とあり盛大に執り行われた様子が伺えます。

さて、この研究を進めるに当たり、方廣寺が本山である東福寺のご住職様のお口添えで、一般では見学できない移築し方廣寺にある行在所を現飯田家の御当主とご一緒に見学させて戴きました。

行在所は、一番高い所に建てられており、入口を入った所で飯田さんは足を止められ軒先を見上げて「この瓦の文様は、飯田家の家紋ですよ」と懐かしそうに仰られました。

次の間の奥に御座所があり、一部が一段と高くなって御簾が下がっておりました。御簾の前には、大きな赤い座布団が置かれていてこの部屋は、館長様が大切なお客様をご接待する時にお使いになられるとの事でした。濡れ縁を右に回ると立派な茶室がありました。

御座所、茶室それぞれの前には、箒目の立ったきれいに手入れされたお庭があり、その一角には、「明治天皇新居行在所」の碑が建てられておりました。方廣寺の静かで、落ち着いた重厚な佇まい中、これからも丁重に保存され続く事を願いました。

本堂にも案内して下さり「新居の人達が行在所を移築した時寄進した神輿があります」と言われ、立派な神輿も見せて戴きました。

そして、現在の飯田さん宅にもお伺いし、行在所跡地を拝見させて戴きました。跡地には、大きな「明治天皇新居行在所舊地」と「史跡境界」と書かれた碑や石組みの池が残っておりました。

この石碑は、明治十八年十一月二日、「明治天皇行

在所及び舊社は史跡名勝天然記念物保存法第1条」発布により飯田家宅地内五十坪が、史跡指定されるのに伴い建てられました。

史跡名勝天然記念物が身近にあるということに驚き、また、天皇陛下がお泊りになられたことは、当時の人達が大勢奉仕したことでも分かる様に新居町の誉れ高き出来事だったと偲ばれます。

これからも大切に保存し未来に繋げていかなければならない貴重な遺産だと感じました。

五、関所建物の存続

明治二年関所廃止令が公布され、諸国の関所が廃止されましたが、今切れ関所がそのまま残されているのは、飯田温徳と関所最後の番頭五味六郎左衛門遊也の努力のお蔭であります。

明治元年明治天皇の御東行と共に二人も江戸に入り、四十七日間滞在し、岩倉具視等の重臣に会い、関所保存を懇願し続けました。朝廷側にアピールするため、関所へ朝廷の御紋付御幕を飾りたいと願い出るなど様々な運動をしました。

温徳の交友範囲は広く、明治政府要路にも多くの知己、友人を持っていました。これらの人達を通し、存続の画策をしました。この陳情が功を奏し、今切関所は、取り壊されること無く、新政府に引き渡されたのです。

新政府も裏では、地の利を生かし、徳川家の家臣や会津、桑名の明治政府転覆を図る人たちを通してはならないとのお達しで動いていたようです。

付け加えると、建物は明治六年六月六日から小学新居学校として四十四年間、その後、役場庁舎して三十五年間使用されました。

一六〇〇年徳川家康が設置した今切関所は、厳しいことで有名でした。

現存する建物は一八五五年当時の物です。

全国で唯一当時の様子を残すものであり、江戸時代の交通史はもちろんのこと、日本史全体の中でも大切な史跡となっております。

昭和三十年には、文部省特別史跡に指定されております。

この様に今、私達が関所を見られるのは、飯田温徳と五味六朗左衛門遊也の功績があってのことです。

六、女手形

飯田本陣に国内最古と言われている女手形が保存されてます。

今まで時代劇などで手形という言葉は知っていましたが、手形の種類や内容については、ほとんど知識がありませんでした。

「入り鉄砲に出女」と言われるように、主に「女手形」と「鉄砲手形」が知られていますが、「乱心手形」「手負い手形」など種類もたくさん有ることがわかりました。

また、「女手形」と言われるように、男性は特に手形は必要ありませんでしたが、江戸から京に上るすべての女性は手形が必要で、手形がないと関所を通ることができませんでした。

手形の内容も厳しく、人数、出発地と目的地、身分の区分、年

齢などの記入漏れや間違いが一か所でもあれば通ることができませんでした。

反対に江戸へ下る女性は、手形は必要ありませんでしたが、交通の要所であった新居関所だけは江戸に下る女性に対しても手形が必要で、その上取り調べも厳しく行われました。厳しい取調べを避けるため、山越えしてまでも気賀の関所に回った女性も多くいたようです。

本陣に保存されている二通の女手形のうち一通をご紹介します。

女六人厩橋より三州まで
参り候
是は西尾丹波　御利候間
相違無く通され可候
以上　卯九月七日
彦九兵　印　新井

厩橋（今の前橋市）から三河の国へ向かう女性六人の女手形です。差出人は、駿府町奉行彦坂九兵衛光政　宛名は新居関所となっています。

これまでは、木曽福島関所宛ての元和七年（一六二一年）の通行手形が最古とされておりました。

しかし、飯田本陣に保存されていた二通の女手形には、年号が書かれていませんが、「卯」とあり、彦坂九兵衛が、駿府町奉行として活躍していた時期から元和元年（一六一五年）のものと推察でき、国内最古の手形と言われています。

女性が関所を通るということは、大変なことで　飯田本陣に保存されている国内最古と言われている女手形が、いかに貴重な資料であるかを改めて知りました。

飯田本陣には未だ解読されていない沢山の資料が保存されています。今後の新たな歴史的発見を期待いたします。

七、花器

関所本陣であった飯田家十七代昌秀の時代に、旧浜名川から発掘された橋杭で作られた花器が、現在も家宝として残っています。直径約五十センチ、高さ約十四センチ、深さ約十二センチで内側には黒の漆が塗ってあります。この花器と一緒に昌秀の書付が納められていました。

私はこの花器をダンボールと新聞紙で作って見ました所、改めてその大きさを実感し驚きました。

古代、平安の頃の浜名川は、今より川幅が広く浜名湖から橋本、松山を通り太平洋へと流れていました。

旅人は高師の山の中を歩き、カチ坂を下り、橋本宿を通り、浜名橋を渡り、対岸の日ヶ崎を通り、海を眺めながら地続きの舞阪へ向かうのが東海道の旅でした。

濱名橋柱花器函銘附註

古の橋柱の朽能古里は。今年弥生。橋本村よ里二町程已能方なる。昔橋ありし跡なりと以ひ伝ふ累。字は観音道坪と以ふ地丹て堀得つ留那里。曽は此所の名所のあ留可那可丹毛。名多丶流毛能尓しあ連婆。万ッ代毛うし那者佐じと。花さ須器丹造りなして。婦多つなき家宝と以つき毛つ耳那れ。

文政七年甲申五月記

飯田昌秀

浜名橋は平安初期貞観四年（八六二年）、四大大橋の中の二番目として天皇の命により長さ五十六丈（一六七m）幅一丈三尺（四m）高さ一丈六尺（五m）の当時としては大きな橋がかけられました。

しかし、海に近く風波の影響を受ける場所にあり、建造後二十年余りで壊れ、元慶八年（八八四年）再び架け替えたのですが、その後、地震・津波等で流失破損や火事などで十一回の修復を重ねています。

室町時代末期、明応五年から永正七年（一五一〇年）にかけても地震、風水害が多く、大倉戸あたりで崖崩れが起き、川幅も次第に細くなり、その頃今切れも切れ、船で渡るようになったため、その後、橋の再建はなされませんでした。

文政七年（一八二四年）飯田昌秀が、万ツ代に伝えるよう書き記してから百九十年経ちました。

この花器の歴史を学ぶことで、素晴らしい橋と浜名川あたりの風景を思い描くことができました。

当時の旅人も感動し多くの歌を残しています。すぐ近くの親水公園の中にも藤原定家の歌碑が建てられております。

影たえて　したゆく水も　かすみけり
浜名の橋の　春の夕暮

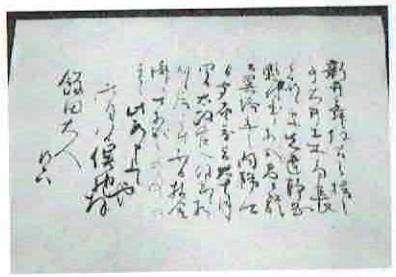
八、へなへな橋

木で作られていた橋で、強度が足りなかったため、三百貫、今でいう一トン以上の荷物の通行は禁止されていましたが、風雨と波による自然の力には勝てず完成後の十一年間で三度も破損、落橋しました。そのため、地元では「へなへな橋」と揶揄されていました。現在で云う第二、第三鉄橋の辺りです。

明治五年、新所、日ノ岡～雄踏間の浜名湖に手漕ぎの船で渡るよりもはるかに速い新しい連絡航路が開かれました。所要時間二時間、定員三十～六十人の蒸気船を多くの旅行者が利用するようになったため、新居宿を往来していた旅人は徐々に減っていき、町が衰退していくことが心配の種でした。

そこで、地元の名士から「新居～舞阪間に橋を架けよう」と言う声が上がり、橋を造る目的で飯田本陣の主人、飯田温徳ら六人が株式総数三百十七株の株式会社「浜名社」を立ち上げました。

やがて静岡県から飯田温徳の元へ今でも飯田本陣に現物が残っている建設許可が届き、橋の着工に到ります。



明治十四年、ついに弁天島を経由する四つの有料木橋が完成しました。橋の部分は、計約一・六㎞、堤の部分は約二・二㎞、大きな船が通る際には、今でいうカチドキ橋の様な橋の中央部が開閉式となっていて、当時としては大変珍しい橋でした。この橋の完成により新居～舞阪間は陸路で結ばれるようになりました。

しかしながら、当時から「へなへな橋」と呼ばれていたように強度が足りず、明治三十二年秋に暴風雨による落橋で修復を断念し、通行手段は再び渡船へと戻ってしまいました。

その後、昭和七年、新居町新居から舞阪町弁天島に架かる西浜名橋が完成し、渡船は廃止されることとなりました。

九、郵便局

本陣廃止後、飯田本陣跡が郵便局になったと聞いてその経緯について調べてみました。

今まで飛脚に頼っていた通信手段をヨーロッパに倣い、前島密により明治四年三月郵便制度が施行されました。当初は、東海道沿線の東京・京都・大阪の三大都市のみでしたが、その二年後、浜松県にも取扱所ができ、新居にも本陣の当主であった飯田温徳の多くの功績が認められ郵便局が設置されることとなりました。

初代郵政大臣の前島密より認可が下り、今でも認可状の実物が保存されています。

また、分厚い木でできた当時の看板三枚を拝見する事ができました。

《新居郵便局》《小包郵便・郵便為替・郵便貯金取扱》《郵便切手・収入印紙・売下所》と書かれた看板が保存されています。

郵便局開始時には四種類の切手があり、合計で五十三貫二百四十八文、現在のお金に換算すると百四十万円位の切手を用意したそうです。

郵便第一号は、高見駿河屋喜太郎から浜松田町棒屋国蔵宛に送られたもので百文、現在のお金で二千五百円位の切手が使われていました。

また、郵便を出すときの様子は、役所みたいな感じで頭を下げて売ってもらったようです。

飛脚も徒歩というより駆け足で届け、その格好も人目を引いたようで、その後、馬も使われるようになりました。

飯田家の業務は、明治六年から大正元年まで四代続きましたが、跡継ぎ幼少のため、疋田紀平に引き継がれました。

終わりに

当時の貴重な資料が、残っているので大切に保存され後世に残して戴きたいと思いました。

■参考文献

・飯田本陣保存資料・写真で見るあらい・新居町史
・新居人の百二十年・新居町史資料編・わがまちあらい
・新居ものがたり
・濱名の渡りと鎌倉への道